琉球弧世界遺産フォーラム

News Letter

2016・1月
vol.8

明けましておめでとうございます。
　今回は當真嗣一会長の「碇石について」、高良勉理事（詩人）の「琉球弧の世界文化遺産とおもろ」、世界遺産マイスターでもある佐滝剛弘氏の「太平洋をつなぐ世界遺産」、岡本義行法政大学教授の「ウォッチバレー」などの力作がそろいました。
　３月６日（日）には世界遺産アカデミー主催の世界遺産検定２級、３級が那覇のウェルカルチャースクールでも実施されます。申し込み締め切りは２月１日。世界遺産を通じて文化と自然を学びましょう。

２０１５年２月、辺野古基地建設予定地・大浦崎の海で発見された碇石

発行：琉球弧世界遺産フォーラム（琉球弧世界遺産学会）
ryusefo@gmail.com

碇石について

當眞 嗣一（琉球弧世界遺産学会会長）

１、はじめに

「古い時代の航海には東海岸の方が便利であった」と説き、日本と琉球間の交通路が「古くは東海岸を主としていたのではないか」と考えたのは民俗学者の柳田国男である。柳田は、その著『海上の道』で、沖縄本島の西海岸と東海岸との間には文化の発達経路に変差があったのではないかと問い、前者に浦添文化、後者に勝連文化の名を与えた。そして勝連文化についての研究が従来軽視されていることを指摘し、その方面の学問研究を進めて行くことの大切さを強調した（柳田國男著『海上の道』筑摩書房 1961 年）。この柳田の期待に応えるかのように 2015 年２月、民意を無視し強行されている辺野古新基地建設予定地大浦崎の海で碇石が発見され話題を呼んだ。早速、地元新聞の投書欄に「碇石は『怒りの意志』」と投稿されるなど碇石に対する県民の関心が高まっている（『琉球新報』2015 年 6 月 21 日の投書欄）。では、碇石とはどんな石だろうか、かつて筆者はあるきっかけから南西諸島発見の碇石について調べたことがある。そうした経緯もあって今回発見された碇石の意義について改めて考えてみることにした。第1図は辺野古大浦崎の海で見つかった碇石。

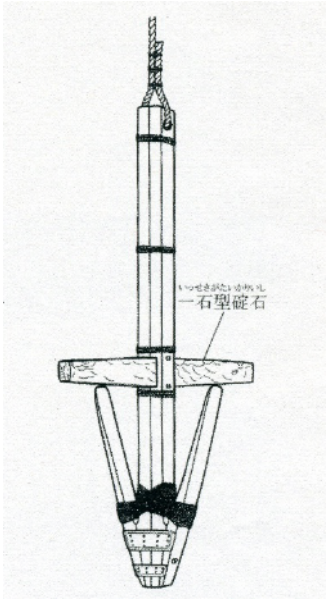
第１図　辺野古大浦崎の海で見つかった碇石

２、謎の石の正体を追え

その前に何故私が何の変哲もない石に興味を持ち、それが実は碇石だということを知ったかということから話を始めることにしよう。今から 30 年も前のこと、沖縄考古学のパイオニア多和田真淳先生からある日突然「當眞くん、山田グスクのメーガーに使われている石は変っている石だから調べてみなさい」との宿題をもらった。それから数年経ってグスク調査で奄美大島を訪ねた際、中央公民館の片隅に無造作に置かれている石が碇石だということを知ることになった。同じ頃、中国の調査旅行で福岡県の考古学研究者松岡さんと行動を共にすることで碇石のことについて教えられた。彼は「蒙古の碇石」と呼ばれている碇石を集成し、すでに研究論文にまとめ世に問うていた。そうしたなか改めてメーガーの井桁石を調べたところ、この石が博多湾周辺の海中および沿海諸地域から発見されるいわゆる「蒙古の碇石」と呼ばれるものと同じ石だということが分かったのである。その後筆者は、南西諸島での碇石の発見が琉球における海外貿易の歴史を跡付けるものであり、他にもまだ見つかる可能性があることを県内の研究者に呼びかけ、同時に「南西諸島発見の碇石の考察」という論文を発表した（當眞嗣一『南西諸島発見碇石の考察』沖縄県立博物館紀要　1996 年）。それからしばらくして奄美大島や本県で相次いで碇石が確認されるようになった。

第２図は山田グスクメーガーの井戸に取り付けられた碇石の写真。第３図はこの種類の碇石推定復元図（小川光彦氏の論文から掲載）。

第２図　山田グスクメーガーの碇石



第３図　碇石推定復元図

３、碇石とは

では、碇石とはどんな石だろうか。船に付随する「いかり」は、船舶を水上の定位置に留め置くための碇泊具であり、一般に石の重さのみを利用した「石いかり」から硬い比重が大きい木を利用した「木いかり」、木と石を組み合わせた「木石碇」、そして「鉄錨」へと四段階の発展を遂げてきたと言われている。

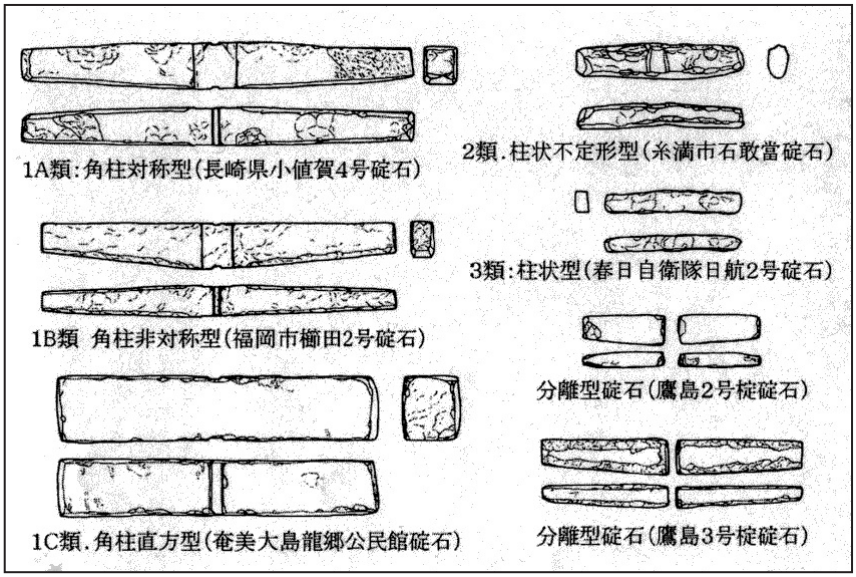
碇泊具の要件として比重を重くし海底に沈みやすく、しかも浮いている船をしっかり固定しなければならない「いかり」は、その機能を発揮するため鉄錨が普及する以前、アンカーストックの役目として石を用い、木のシャンクやアームなどと組み合わせて使用された。こうしたアンカーストックのことを碇石というのである。つまり碇石は、加工を施した石材を木に装着し、爪を付けた木製いかりの石材部分のことをいうのである。すでに福岡県や佐賀県唐津市等で「蒙古碇石」として文化財指定されている大型の碇石はこうしたアンカーストックとして使用された石製品のことであり、多和田真淳先生からの宿題だったあの山田グスクメーガーの井戸に取り付けられた石こそは、そうしたアンカーストックとしての石製品だったわけである。

４、「蒙古碇石」と呼ばれた碇石について

博多湾を中心に発見されたいわゆる「蒙古碇石」については、戦前に川上市太郎によって研究の先鞭がつけられてから鏡山猛、岡崎敬、松岡史といった主として九州の学者によって研究が進められてきた。これまでの研究成果によると定型化した大型の碇石すべてが「蒙古碇石」と見るのは無理だということがわかってきた。つまり、現在ではこの種の定型化した碇石を蒙古襲来時の遺物と特定せず、鉄錨以前中国を中心に日本・琉球や朝鮮、フィリピンなどを往来した貿易船装備の碇石ということが明らかになってきたわけである。したがって、南西諸島で発見された碇石についても東アジアを舞台に広範な活動をしていた大型外洋船の航跡を示すものとして理解したい。沖縄県で発見された定型化した大型の碇石は、前述した山田グスク城下のメーガーの碇石一個、久米島町の字江城城跡から見つかった二個、同じく久米島町内で発見され現在名護市市立博物館が所蔵する一個の合計４個の碇石が確認されている。

こうした定型化された大型礎石の形状については、松岡史によって角柱対称型（1A）と角柱非対称型（1B）に分類され、碇石といえばこれまで角柱対称型のものが一般的とされてきた。しかしその後、奄美大島で角柱直方型の碇石が筆者によって二個確認されたことによって新たに角柱直方型（1C）が追加されてきた（第４図）。現在では定型化したこうした碇石以外にも柱状不定型の碇石や柱状型の碇石、さらには主に鷹島海底遺跡で発見されている定型化した碇石を二分割したいわゆる鷹島型碇石と呼ばれる碇石など多様な碇石の存在が確認され、いろいろな碇石の分類がなされている。同時に碇石研究の発展により、こうした多様な碇石の主体となる船についても論じられるようになってきている。そうした碇石の研究を押し上げた一つの要因は、長崎県北松浦郡鷹島の神崎港沖で 1994 年に二石の碇石を装着した九門の木製碇が発見されたことであった。この調査にかかわった小川光彦氏は、碇石についてこれまでの分類基準を再整理して第５図に見るような分類を行っている（「東アジア海域における中国スタイル碇石の研究」第1回韓・日共同水中考古学研究発表会論文集　2008 年）。

第４図　角柱直方型の碇石
（奄美大島旧龍郷町中央公民館の碇石）



第５図　小川光彦氏による碇石の分類
（氏の論文「東アジア海域における中国スタイル碇石の研究」から掲載

碇石の分類で一般的とされる角柱対称型の碇石が発見された地域は、現在、北は沿海州のウラジオストック、山口・茨城・福岡・佐賀・長崎・奄美大島・沖縄、中国福建省泉州市、フィリピンなどであり、全部で 100 個以上の碇石が見つかっている。では、これらの定型化した大型の碇石はいつ頃装備されていたのであろうか。現在のところ使用年代を特定できるまでにはいたってないが、13 世紀の初頭、すでに四ツ爪の鉄錨を使用したイスラムの外洋船が中国の広州・泉州にまでその航跡を記していることを考慮に入れると、13 世紀頃までには中国でも鉄錨に変わっていた可能性がある。ただ、『中国古代的造船和航海』の著者金秋鵬の「明朝代には鉄錨が普及したが、木碇はそのまましばらく使用され、すぐに淘汰されたわけではなかった」という意見もあるので使用年代についてはある程度の幅を考慮に入れる必要があろう。

中国の研究者は福建省泉州湾から出土した碇石の重量から船のグロストンを推量しているが、それを踏まえて試算すると碇の総重量を 300 ～ 350kg とした場合、船の最大グロストンは 170 トンから 200 トンとなる。南西諸島で発見されている定型化した碇石はその大半が 300kg 以上もある大型碇石であることから琉球近海には 200 トン級の大型外洋船が寄港地を求めてやってきたことが推測できる。

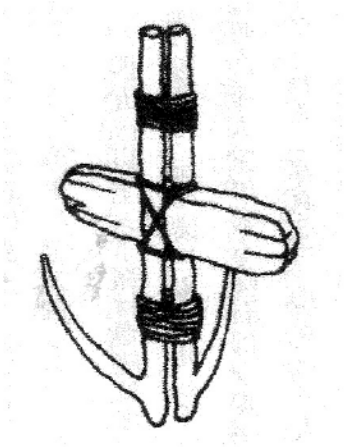
５、辺野古大浦崎の海で発見された碇石について

ところで今回辺野古大浦崎の海で発見された遺物は、碇石分類中どういうものに属するだろうか。発見された場所が基地内のため米軍の許可が必要とされ、私たち研究者の間でもなかなか見る機会がないなか名護市教育委員会の計らいで見せてもらったところ、中央部に石を軸に固定するための加工痕を有し、北部で取れる石材であり、柱状の扁平な自然石に近い形状をしているという特徴等から 2 類の「柱状不定形型」の碇石だということがわかった。マスコミ報道等によれば「長さが 57 ㎝、幅、厚さはともに 10 ㎝で、重さは 15 kg」ということである。また、同定を行った沖縄県教育委員会文化財課は「県内の砂岩で作られており、県産の碇石としては５例目、本島東海岸で見つかったのは初めて」というコメントを寄せている（『琉球新報』2015 年7月 1 日付け）。

この２類に分類される碇石は、これまで糸満市、うるま市、本部町、恩納村において一例ずつ確認され、今回のものを含めて全部で５例ということになる。糸満市やうるま市の例では、それぞれ民家の「石敢當」に転用されたものであり、どこの海底から引き揚げられた碇石なのか分からなかった。本部町の碇石は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 16 年度から平成 21 年度にかけて実施した「沿岸地域遺跡分布調査」の際に瀬底島のアンチ浜の海底から引き揚げたもので、使われた場所が特定できる初めての例として注目された。また、恩納村の碇石は、辺野古の海発見の碇石報道をテレビで見た村民が同村教育委員会に持ち込み確認されたもので、恩納村冨着の海・水深２ｍほどの海底から引き揚げたという証言が発見者の方から寄せられている。

今回の碇石の場合には、見つかった石が文化財だということだけでなく、考古学的な資料としていえば海で発見されたということ、さらに辺野古の海が冒頭に述べた柳田國男の「海上の道」との関わりで東海岸地域だということに大きな意義がある。

つぎに、この２類に分類される碇石の特徴を見ることにしよう。いずれも軸着装部溝はあるものの固定溝がない、小型で成形が粗く自然礫に近いものが多いことなどが挙げられる。固定溝がないことは、中国船舶に装備された定型化した碇石との決定的な違いである。残念ながらこうした２類の碇石を装備した考古学的資料の発見がないので構造的なことはよくわからない。しかし、鷹島海底遺跡の調査指導に関わるなど碇石の全国的調査を行っている石原渉は、中・近世の絵画資料に描かれた和船や、これまで発見されたこの種の碇石を分析し、その著『碇の文化史』の中で次のように述べている。「和船の碇石は明らかに自然礫に近い扁平な柱状のものであり、それをレ字の爪をもつ木製部材の碇身で両側から挟むという形式の、いわゆる木碇、俗称「唐人碇」というものであるということが分かる」（石原渉著『碇の文化史』思文閣出版 233 頁）。第６図は、石原渉著『碇の文化史』に掲載されている木碇の模式図であるが、おそらく沖縄県発見の２類に属する碇石は、この図に見るような構造の碇であった可能性が高い。しかしながらこうした２類の中には、軸着想部としての加工痕が片面のみに施され、他面が自然面に近いのも含まれている。こうした軸着想部片面加工の例などは片爪だったことも考えられる。以上これまで見てきたように碇石の存在は、鉄錨以前の琉球船舶に装備された碇石と見て間違いないであろう。



第６図　木碇の模式図
（石原渉著『碇の分化史』より掲載）

碇石の発見は、碇石を装備した船の存在を立証するものであるが、実際引き揚げられた海域の特定があって初めて船舶の海上交通路との関係において大きな意義をもつことになる。そういう意味では、瀬底島アンチ浜碇石の例や今回の辺野古大浦崎碇石の例、さらには恩納村冨着碇石の例などは、こうした碇石を装備した船舶が往来・碇泊していた地域だったことを裏付ける確かな証拠となる。事実、恩納村冨着の碇石が引き上げられた海は、船が停泊する所ということで「トゥマイバーマ」とも呼ばれていたようである（『広報おんな』2015 年9月 1 日掲載）。また、

大浦湾近海では、帆船が停泊するなど沖縄北部東海岸海上交通の拠点だったことを示す近世琉球王府史料の存在が琉球大学の真栄平房昭教授によって明らかになった（琉球新報 2015 年7月２日付け記事）。
　碇石の発見は、周辺海域を舞台にした交易船の活躍を示す貴重な物的資料であり、当時の海運や流通および海上交通史、文化史を考える上で重要なものであることはこうしたことからも理解されるのである。

６、終わりに
　では、海上交通史上こうした碇石の使用から鉄錨の時代に遷り変っていくのはいつ頃からであろうか。久米島の『公孫姓家譜』には、その時代のことを知る史料が見えている。
　つまり、久米島仲里間切公孫姓　四世絜賢　与座親雲上の時代に次の記載がある（『仲里村史　第三巻　資料編２　近世・近代仲里の文献資料』 698 頁）。その記事を下記に記して本稿を閉じることしよう。

・雍正五年（一七二七）
上司に報告して久米島の船が初めて鉄製の碇を使った。もともと地元船は木製の碇を使っていて鉄製の碇はなかった。そこで那覇を往復する時に、逆風に逢ったり、どこかの島に停泊するときは、いつも破損の心配があった。上司にお願いして鉄製の碇を初めて使い後世になっても航海が便利になった。

・雍正五年（一七二七）
地元船は、久米島で造船したので那覇往還時に逆風に逢えば顛覆沈没の心配があった。そこで上司にお願いしてはじめて馬艦船を造らせその後は海上の風波の心配もなく便利になった。

「奄美・琉球」の宝

山内 道美（今帰仁グスクを学ぶ会）

「奄美・琉球」の宝を一言でいうと「その多様性」にあります。
　何が多様なのかというとありとあらゆるもの。自然と文化の多様性がその土地の魅力となっています。
　前近代といわれた時代には地球上のどの地域にもそれぞれの自然や文化の多様性が見られたのですが、メディアや交通の発達により「地方の衰退」あるいは「地方の都市化」が進んだ結果、今やどこへ行ってもだれもが同じような格好をし、同じようなものを食べ、同じような番組を見、同じような言葉をしゃべるようになってしまいました。
　この文章を読んでおられる多くのみなさんはきっと「旅行大好き人間」だと思いますが、地球がずいぶん狭くなったなぁと感じておられませんか。私は新しい土地を旅する醍醐味は、まず降り立った瞬間のその土地の匂いと音、そして見たこともない景色を見、食べたことのないものを口にし、自分とは異質のくらしをする人たちと出会うこと。つまり「未知の世界」に出くわすことだと思うのですが、最近旅をしていて、以前に比べて驚くことや感動することが少なくなったと感じるのは私だけでしょうか。国境を越えるたびに通貨を両替し、エキゾチックな衣装を身に着けた人たちの聞いたことのない言葉が聞こえてきたときのあのゾクゾク感・ワクワク感がもはや遠い過去のことになってしまった気がします。グローバル化が進むというのはそういう喜びがどんどん無くなってしまうことなのかもしれません。かつては何もいじらないありのままの姿がその土地の魅力だったのに今や無理矢理人の手によって観光資源を作らねばならない（現在沖縄で進行中のＵＳＪ計画やディズニーリゾート計画など全く必要なし）。そんな時代になってしまったことを私はとても残念に思います。
　かつて北部琉球文化圏に属していた「奄美・琉球」にはユネスコが「危機言語」に認定した６つの琉球諸語のうち「奄美語」と「国頭語」があり「沖縄語」と区別されています。私の暮らす今帰仁村は「国頭語圏」に属していますが、村内にある 19 の字のそれぞれが微妙に異なる「しまくとぅば（シマ言葉）」を持っています。このことは私たちの今帰仁村だけでなく他の地域にも言えることです。とくに「やんばる」といわれる県北部地域の集落では「しまくとぅば」だけでなく、地元の人たちによって部落ごとに独自の祭祀や芸能がいまも継承されています。
　特筆すべきは、そういう多様な文化が残されている地域の多くが、じつは「生物固有種」の生息・育成地域と重なり合っているという事実です。現在最終段階を迎えている「奄美・琉球」の世界自然遺産登録は、レッドリストに掲載されている国際的希少種の生息・育成地での生物多様性保全を図る上でとても重要な意味を持っています。
　冒頭で「奄美・琉球」の宝と言いましたが、その宝とはじつは日本の、また世界の人にとっての宝でもあります。「奄美・琉球」の自然、そしてそこで長い時間をかけて育まれてきた文化の多様性もまた保全されるべき大切なものだと考えます。いったん消滅してしまえば再生することはないのですから。

琉球弧の世界文化遺産とおもろ

高良 勉（詩人）

（１）勝連城跡とおもろ

高良　勉

琉球弧の文化遺産が 2000 年 12 月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界文化遺産へ登録された。その内容は、五つのグスクと二つの御嶽、一つの庭園、一つの陵墓となっている。

したがって、おもろには世界遺産になったグスクや御嶽等を謡ったものが含まれている。これらのおもろを選んで鑑賞してみよう。

阿嘉（あか）の子が　能（よ）くも　又もが節
一　勝連（かつれん）わ　何（なお）にぎや　譬（たと）ゑる
　大和（やまと）の　鎌倉（かまくら）に　譬（たと）ゑる
　肝高（ルビ・きむたか）わ　何（なお）にぎや
　　（十六巻一一四四）

【意訳】【高良勉試訳】
一　勝連の地域は何に譬えようか
　大和の鎌倉に譬えるのだ
又　肝高・勝連の地域は何に譬えようか
　大和の鎌倉にこそ譬えるのだ

＜語注＞
①勝連＝勝連城を中心とした地域。
　現在のうるま市の中に在る。勝連城を居城とした阿麻和利（あまわり）が勝連按司のとき最も栄えた。
②何にぎや＝何に。何にこそ。
③鎌倉＝源頼朝が武家政権の鎌倉
　幕府を開いた地。1192 ～ 1333 年の間の政治・文化の中心地として栄えた。現在の神奈川県鎌倉市。
④肝高＝勝連の美称。志があり気高いこと。勝連の対句として表現される。

＜解説と鑑賞＞
世界遺産になった五つのグスクのうち、まず勝連城跡関連のおもろを見てみよう。15 世紀の半ば、勝連半島には阿麻和利という英雄が出現し大いに栄えた。

その時代の様子を、おもろでは勝連は「大和の　鎌倉に　譬ゑる」と謡っている。なんとも壮大なおもろではないか。勝連地方が、日本を二分した東国政権の鎌倉に譬えられているのである。

阿麻和利政権は、東海岸の海上の道を支配し、奄美諸島をはじめ、このおもろにも謡われている「大和」・「鎌倉」などの日本とも交易し、多くの富が集まっただろうと言われている。

そして、阿麻和利は中城城主の護佐丸を破り勢力が盛んになっていった。だが、そのことが第一尚氏の尚泰久王（1415 ～ 60）の権力を脅かすことになり、首里王府軍の攻撃を受け滅びた。

阿麻和利は、首里王府の正史『球陽』には「逆臣」と記載されている。また、玉城朝薫作の組踊「二童敵討」でも敵を討たれる逆賊と表現されている。それ故か、今でも阿麻和利は逆賊というイメージを持っている人々も多い。

しかし、その逆賊であるはずの阿麻和利は、同じく首里王府が編さんした『おもろさうし』には、歴史上の英雄として数多く登場する。その一つの例を見てみよう。

一　勝連（かつれん）の阿麻和利（あまわり）
　聞ゑ阿麻和利や
　大国（ぢゃくに）の　鳴響（とよ）み
又　肝高（きむたか）の阿麻和利
　　（十六巻一一四一）

【意訳】【高良勉試訳】
一　勝連の阿麻和利
　　名高い阿麻和利は
　　国中に鳴響む人として評判だ
又　肝高の阿麻和利
　　立派な阿麻和利は
　　国中に鳴響む人として評判だ

＜語注＞
①大国＝国の美称。国じゅう。
②肝高＝勝連の美称。

　このように、阿麻和利は首里王府軍に亡ぼされたにもかかわらず、「肝高の阿麻和利」としておもろで讃えられ、今でも勝連地方の人々を中心に親しまれている。
　この阿麻和利の居城であった勝連城跡は、東海岸を代表する大型グスクとして世界遺産に登録された。勝連城跡と中城城跡の存在と、阿麻和利、護佐丸の叛乱は統一琉球王国がまだ不安定な頃の歴史を物語っている。

（２）中城城跡とおもろ
　私たちは、前回のおもろ鑑賞で世界文化遺産の勝連城跡に関連するおもろを鑑賞した。そこで今回は、勝連と対比して語られることの多い中城城跡に関連するおもろを見てみたい。

　おもろくさりおろちへが節
一　聞（きこ）ゑ　中城（ぐすく）
　　東方（あがるい）に　向（む）かて
　　板門（いたやぢや）　建（た）て直（なお）ちへ
　　大国（だくに）　襲（おそ）う　中城（ぐすく）
又　鳴響（とよ）む中城（ぐすく）
　　てだが穴（あな）に　向（む）かて
　　（二巻四二）

【意訳】【高良勉試訳】
一　名高い中城城は
　　東方に向かって
　　板の城門を建て直して
　　大いなる国を支配する中城だ
又　鳴り響いている中城は
　　東方の太陽の穴に向かって
　　板門を建て直して
　　大国を支配する中城であるよ

　＜語注＞
①聞ゑ＝聞こえる。名高い。
②中城＝沖縄島中部の地名。
③東方＝「あがる」は東、「い」は「へ（辺）」と同じ音。
④板門＝板でできた城門。観音開きの門が多い。
⑤大国＝国の美称。
⑥襲う＝保護し、守護することから、支配する。
⑦鳴響む＝鳴り響く。
⑧てだが穴＝太陽の出現する穴。東方の意。

　＜解説と鑑賞＞
　世界遺産の勝連城跡に対抗する遺産は、中城城跡であろう。中城は護佐丸按司の居城として、現在の中城村、北中城村にまたがり支配していた。
　その護佐丸は、時の尚泰久王によって阿麻和利に対抗させるため、読谷村の座喜味城から移封させられたという。

沖縄東海岸の勝連城を、同じ東海岸で牽制するするために中城は重要な拠点だったのである。東海岸に、勝連城と対抗できる大型グスクは中城城以外には存在しなかった。

ところで阿麻和利按司は、尚泰久王に「護佐丸按司が首里城を攻めるため兵馬の準備をしている」と讒言した。そして 1458 年、首里王府軍と一緒に中城を攻め滅ぼしてしまった。

その阿麻和利も、後に首里王府軍を攻めるために挙兵した。しかし、激しい攻防戦の末に王府軍に滅ぼされてしまった。伝承によれば、阿麻和利軍は勝連から中城湾を横切り、与那原浜から首里城へ向け進軍したという。

この首里城、中城城、勝連城をめぐる争乱・戦いが終結することによって初めて琉球王国の王権が安定することになった。

今回のおもろでは「聞ゑ中城」「鳴響む中城」「大国　襲う　中城」と中城の栄えている様子が歌われている。しかも「東方に　向かて」「板門　建て直ちへ」と盛んに城を改築し、防備を強化している様子がうかがえる。

おそらく「東方に」「てだが穴に　向かて」という対句からは、太陽神の霊力に祈ることも意味しているだろう。

中城城跡に関連するおもろは「第二巻　中城越来おもろ」に集中して編集されている。その数は、十五首である。もう一首だけ引用して、鑑賞してみよう。

おもろくさりおろちへが節
一　聞（きこ）ゑ　中城（ぐすく）
　良（ゆ）かる真男（まいくが）
　のろ子達（くた）　集（つ）めて
　名揚がりよわちへ
又　鳴響（とよ）む中城（ぐすく）
　（二巻四四）

【意訳】【外間守善訳】
名高く鳴り轟いている中城は、
勝れた男、神女たちを集めて、名高くなり給いて栄えていることよ。

ここでも中城が「聞ゑ中城」「鳴響む中城」と対句で讃えられ、ますます栄えていくことが予祝的に祈られているのである。

（３）今帰仁城跡とおもろ

私たちは、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の中ですでに勝連城跡、中城城跡に関するおもろを鑑賞してきた。今回は本部半島にある今帰仁城跡に関するおもろを見てみよう。

今帰仁城跡は、沖縄島が北山、中山、南山の三山に分かれていた時代の北山王国の居城であった。今帰仁城を中心にした北山王国は、沖縄島北部地域のみならず、奄美群島の与論島や沖永良部島までその勢力圏に含まれて、中国とも独自に朝貢・冊封関係を結んでいたという。

しよりゑとの節
一　聞（きこ）ゑ　今帰仁（みやきぜん）
　百曲（ももまが）り　積（つ）み上（あ）げて
　珈玻囉（かわら）寄（よ）せ御ぐすく　げらへ
又　鳴響（とよ）む今帰仁（みやきぜん）
　（十三巻八七〇）

【意訳】【高良勉試訳】
一　名高い今帰仁は
　百曲りの　城壁を積み上げて
　貴重な珈玻囉玉を　寄せ集めるぐすくを　造営して立派な　ことよ
又　鳴り響く今帰仁は
　城壁　百曲がりに積み上げて
　珈玻囉玉を　寄せ集めるぐすくを　造営して立派な　ことだ

＜語注＞
①聞ゑ＝聞こえる。名高い。
②今帰仁＝地名。今帰仁村。

③百曲り＝幾壁にも曲折した城壁の形容。多重に曲折した。
④珈玻囉寄せ御ぐすく＝貴重な玉を寄せ集めるぐすく。

＜解説と鑑賞＞
　今帰仁城を讃えるおもろが、百曲りの城壁と貴重な珈玻囉を取り上げて誉めているのは注目してよい。今帰仁城跡の石垣は琉球古石灰岩を積んでできている。この岩石は、中南部の琉球石灰岩よりも硬く黒灰色をなしている。城壁は、ほぼ自然なままの岩石「野面積み」の方法で積んである。そして、まさに「百曲り」と称されるほど屈折して積まれた大型ぐすくになっている。こんなに、大規模で多重に曲折した城壁はほとんど無い。
　一方、珈玻囉とは宝玉のことを表している。分かりやすい事例では、ノロたちが首からかける曲玉などがある。おもろ時代には、今日の金銀と同様に珈玻囉も貴重な宝物であった。その宝玉が貢納され寄せ集まるほど名高く繁栄したぐすくだったのである。
　そのような今帰仁城も、1416 年に中山軍によって滅ぼされてしまった。ここに初めて中山、北山、南山が統一された琉球王国が誕生したのである。
　その後、今帰仁城は首里王府から派遣された「北山監守」の居城となった。そして、1609 年の薩摩藩による琉球侵略の時には激しい戦闘で抵抗したという。今帰仁城跡は、統一琉球国に併合されて後も北山の防衛拠点として重要な要塞となっていたのである。
　今帰仁を讃えたおもろは、主に「第十七巻　恩納より上のおもろ御さうし」に編集されている。そのおもろの例を見てみよう。

一　聞（きこ）ゑ今帰仁（みやきぜん）に
　　大神酒（みき）の満（み）ち上（あ）がるぐすく
又　鳴響（とよ）む今帰仁（みやきぜん）に
　　（巻十七の二四）

【意訳】【高良勉試訳】
一　名高い今帰仁城は
　　神酒がいっぱい満ち満つるぐすくであるよ
又　鳴り響く今帰仁は
　　大神酒が満ちあふれるぐすくであるよ

　＜解説と鑑賞＞
　これらのおもろを読むと、当時の宝物として重視されたものが、「百曲り」の石垣・城壁、「珈玻囉」「大神酒」等であったことが分かる。おもろは、それらが満ちあふれている栄華を歌うと同時に予祝的に祈っているのである。
　なお、今帰仁城跡は現在でも沖縄島の門中の人々が「今帰仁上り」と称して数年に一度巡礼する崇拝・信仰の中心を成している。

大西洋をつなぐ世界遺産
～スウェーデン・ヴァールベリのグリメトン無線局～

佐滝　剛弘（リベラル・アーツ・ジャーナリスト）

グリメトン無線局の機械棟と鉄塔

目の前に広がるのは、均等な間隔で天を突くように聳える６基の鉄塔。一見送電用の塔にしか見えないこの武骨な塔が世界遺産だといわれても、多分多くの人は信じられない思いだろう。

2004 年に世界遺産に登録された、スウェーデン南部の街ヴァールベリの近郊にある「グリメトン無線局」は、見る者の世界遺産へのイメージを見事に打ち砕く不思議な世界遺産の典型例である。

宮殿や教会、城郭、大規模な遺跡など、世界遺産といえば頭に浮かぶ定番の有名施設とは一味違った世界遺産が存在することは、2014 年の「富岡製糸場と絹産業遺産群」や 2015 年の「明治日本の産業革命遺産」など国内の地味な産業遺産の登録で、ある程度認知が進んできたが、それでも、世界各地にはまだまだ不思議な世界遺産が数多く存在する。これからご紹介するグリメトン無線局もそうした「びっくり世界遺産」である。

ヴァールベリは、オーレスン海峡を隔ててデンマークと向き合う港町ヘルシンボリからスウェーデン第二の町ヨーテボリへと向かう高速道路沿いにある海辺の町で、そこから車で 10 分ほどの地に、グリメトン無線局はある。世界遺産の施設としては、冒頭で触れた高さ 127m の鉄塔６基とその間をつなぐワイヤ、無線局の心臓部で様々な機械が入った建物、そして職員の住宅などが含まれる。建設は 1922 ～ 24 年というから、第一次大戦が終わった直後ということになる。この施設は、電波を６本の鉄塔で増幅させ、大西洋を越えてはるかアメリカ大陸にある基地へと送信するためのものである。

なぜ、このような施設が必要であったかを説明するためには、氷河にぶつかって処女航海で沈没した、あの有名な豪華客船「タイタニック号」にお手伝いを請わねばならないだろう。

グリメトン無線局の完成からさかのぼること十年ほど前の 1912 年 4 月、北アイルランドのベルファストで進水式を迎えたばかりのタイタニック号がイギリス南部の港町サウサンプトンを出港した。目的地は「自由の女神」が建つニューヨーク港。アメリカは夢の新天地。貧しさから抜け出せないヨーロッパの人々がアメリカン・ドリームをつかもうと、大西洋航路の客船の三等船室に殺到していた時期である。タイタニック号の乗船客も、一等船室こそ紳士淑女で埋まっていたが、その百分の一ほどの値段で乗れる三等客室には、新大陸を目指す移民たちが大勢乗っていた。タイタニック号が造られたベルファストに 2012 年、つまり悲劇からちょうど 100 年後に開館したタイタニック博物館には、乗船客の国籍別の人数がグラフでわかりやすく展示されている。一位は現在のアイルランドも含むイギリス（当時は、アイルランドはイギリスの一部であった）、二位はアメリカ、そして三位が何とグリメトン無線局があるスウェーデンである。今でこそスウェーデンは福祉が進んだ理想の国であり、ボルボやＩＫＥＡなどの企業に代表されるような先進国であるが、わずか 100 年前は、冷涼な気候で作物もあまり育たず産業も乏しい、非常に貧しい国であった。一旗揚げようと思うならアメリカに向かうしかない。タイタニック号の悲劇で犠牲になったのは、こうした渡米へ夢を託した人々だった。

このようにアメリカにはヨーロッパの多くの国からの移民が押し寄せていたが、その移民と本国の家族との間で連絡を取るために、19 世紀末に発明された無線電信を使おうとスウェーデンで建設された施設が、このグリメトン無線局であった。

そう聞くと、この世界遺産がスウェーデンの南西部の海に近いところに建てられた理由もよくわかる。スウェーデンの中ではアメリカ大陸に一番近い地理的条件を備えていたからである。

このグリメトン無線局は、まずビジター―センターの簡単な展示と映像によって概要をつかんだ後、入場チケットを買って世界遺産となっている建物へ入ることができる。中には、スウェーデン人科学者アレキサンダーソンが発明した高周波の発電機のほか、電波を送るのに必要な機械が当時のまま残されている。実際にアメリカに電波を送信していたのは 1950 年代までだが、その後もスウェーデン軍の潜水艦との交信に利用されるなど、1990 年代まで実用に供していた。機械は今も電源を入れれば動かすことができ、年に数回、デモンストレーションが行われるなど、生きた産業遺産として保存・活用されている。シンボルである鉄塔の真下にも歩いていくことができる。足元から見上げる鉄塔の迫力は、大西洋を越えて家族をつなごうとした人々の思いを想起させるに十分だ。

アメリカには、現在も 400 万人以上のスウェーデン系の住民が暮らしており、町がほぼスウェーデン系の人で占められるというところもある。20 世紀中ごろにハリウッドで活躍した女優の中にも、スウェーデン人がいる。『カサブランカ』『ガス燈』などの作品で知られるイングリッド・バーグマン、『肉体と悪魔』『ニノチカ』などに出演したグレタ・ガルボなどがスウェーデン出身で銀幕を彩ったスターである。彼女たちも大西洋を船で渡り、家族や親類などの係累と、無線局を介して連絡を取り合ったことだろう。

ちなみに、グレタ・ガルボの墓は首都ストックホルムの郊外にある「森の墓地（スコーグスシュルコゴーデン）」にあるが、ここは墓地全体が世界遺産に登録されている。コンペで選ばれた若き建築家によって計画的に造られた市民墓地であり、死後は森に還りたいという北欧人の死生観をよく表していることが評価されて、1994 年に世界遺産に登録されている。

世界遺産「森の墓地」

ニューヨーク・リバティ島に立つ世界遺産「自由の女神像」

また、大西洋航路でニューヨークの港に着く直前、移民たちが船上から仰ぎ見たアメリカのシンボルであり自由の象徴でもある「自由の女神像」も、世界遺産である。1886 年、アメリカの独立百年を記念して、フランスから贈られたモニュメントの設計には、エッフェル塔の設計で知られるフランス人建築家、ギュスターヴ・エッフェルもかかわっている。

「グリメトン無線局」「森の墓地」「自由の女神像」という一見つながりがないように見える世界遺産は、こうしてひとつのストーリーで結ばれているのである。

また、タイタニック号の悲劇も、長い間、イギリスやアイルランドでは、あまり積極的に語られることはなかったが、レオナルド・デカプリオ主演の映画「タイタニック」（1997 年・アメリカ）の世界的なヒットや北大西洋の海底に沈む船体の発見などもあって、追悼、顕彰の意味合いと観光資源としての注目の高まりから、ゆかりの地で様々なイベントが行われたり、展示施設がオープンしたりしている。

先述した北アイルランド・ベルファストは、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてタイタニックをはじめ、多くの客船が建造された造船の町であったが、今は造船所も閉鎖され、町の活気が失われていた。しかし、2012 年に巨大なタイタニック博物館が開館、またタイタニック号を実際に建造したドックが公開されるなど、「タイタニックの町」として観光客を呼び込もうとしている。また、タイタニック号の運行を担った船会社ホワイト・スター・ラインの本社があったリヴァプール、処女航海の出発地サウサンプトン、出港後ニューヨークへ向かう途中にタイタニック号が寄港したアイルランドのコーヴ（当時の名称は、クイーンズタウン）、犠牲者の共同墓地があるカナダ・ハリファックスなど、タイタニックゆかりの地も、タイタニックファンからは「聖地」として注目を集めている。

タイタニック号の唯一の日本人乗船客で無事救助された細野正文氏についても、孫にあたるミュージシャンの細野晴臣さん（元、YMOのメンバー）が手記を書いたり、テレビ番組で祖父の思い出を語ったりするなど、そのつながりが日本でも知られるようになった。

６本の武骨な鉄塔が立ち並びその下にシンプルな機械棟があるだけの地味な世界遺産は、このように豊饒な物語を秘めているのである。

その前に立つだけでそのスケールや豪華さに圧倒される世界遺産とは別に、その背後にあるストーリーを知ることによって、想像力を掻き立てられ、歴史の綾の不思議さに胸を打たれる世界遺産も確実に存在することを、世界遺産が大好きな国民である私たち日本人も知っておいてよいだろう。

2016 年以降も、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」「神宿る島　宗像・沖ノ島」など、日本からも多くのストーリーを秘めた世界遺産が登録されようとしている。新たな世界遺産登録のニュースの際には、単に旅行の目的地がまた増えたというだけでなく、遺産にまつわる様々なエピソードやほかの地域や国とのつながりなどにも思いを馳せられる人が一人でも増えてほしい、そう願って新しい世界遺産の誕生を待ちたい。

2012 年開館の「 タイタニック・ベルファスト」の外観

博物館「タイタニック・ベルファスト」に展示されている、タイタニック号の犠牲者の国別の人数

ウオッチ・バレー
「ラ・ショー・ド・フォン／ル・ロクル、時計製造都市の都市計画」

岡本 義行（法政大学大学院政策創造研究科教授）

ローレックス、オメガ、ブランパン、ティソーといった高級時計、そして大衆的なスオッチに対する人気は、金持ちだけではなく若者の間でも世界中で強い。アジアの金持ちが競って購入する。この高級時計は機械式であり、実はスイスの山の中で職人によって手づくりで生産されている。ブランド時計の多くはここで生まれる。時計の輸出によって、約1兆円をスイスは稼ぎ出している。しかも金額ベースでは増加してきた。

この地域はジュラ山脈中にあり、ラ・ショ・ドゥ・フォンという小さな町が中心都市である。そこに時計メーカーや精密機械メーカーが集積して産地を形成している。町の周辺は牛がのんびりと草を食んでいるスイスのおなじみの風景が広がっている。ヌーシャテルという中都市の時計産業が中核であるが、ジュネーブからローザンヌにかけた一体に広がっている。ジュネーブには誰が買うのかと思うほど、たくさんの時計屋が並んでいることに気付くだろう。

時計産地がこの地に生まれ始めたのは 16 世紀である。スイスのフランス語圏に位置する。ヨーロッパ中を戦乱に巻き込んだ宗教戦争の過程で、多くの難民が生まれ、新教の中心地ジュネーブに逃げ込んだ。新教徒のユグノー派といわれる人々で、彼らの多くは職人であり、時計の技術ばかりでなく高度な工芸技術を持った人々もいた。これが高級時計の資源となった。

18 世紀になるとジュラ山中に時計技術が広がり、農業で生計をたてながら、農閑期の副業として時計を造っていたといわれる。ジュネーブでは、新教が装飾品や奢侈品を禁じたこともあり、金銀や宝飾品の職人は時計生産に転換していった。ここから装飾性の強い時計を生産する伝統と技術が融合した。

機械式時計が主流であった時代、時計の最強の生産国はスイスであり、日本が追っていた。やがて、機械式の時計はデジタル時計にとって代わられる。1960 年代と 70 年代における、いわゆる「クオーツ革命」である。クオーツの技術はスイスで開発されたが、商品化したのは日本であった。あっという間に世界をデジタル時計が席巻し、スイスの機械式時計メーカーばかりでなく、日本の時計メーカーは大きな打撃を受け、多くのメーカーが壊滅した。スイスのジュラ地域でも、多くの雇用が失われ地域の社会問題となった。

地域問題となり、政府や銀行が支援し時計産業の再生に取り組むことになった。当時コンサルタントを努めていたハイエクのリーダシップで、時計メーカーの業界再編が行なわれた。時計メーカーはいくつかのグループの傘下に入って、機械式の高級時計は再び息を吹き返した。

スイスの時計は装飾性を強めて、「高級ブランド品」として生き返った。高級時計の生産技術があるだけでは世界に向けたブランド化はできない。ラ・ショ・ドゥ・フォンやヌーシャテルの時計メーカーは、ブランド化やマーケティングのために、イタリアやフランスから専門家を招いている。ヌーシャテルはヌーシャテル湖に面した風光明媚な都市である。フランスから国境を越えて専門家や技術者、そして労働者が働きに来ている。実際、職人が不足しているといわれている。

ウオッチ・バレーの時計産地には、現在600社の時計関連メーカーと4万人の人々が働いている。ほとんどが従業員100以下の中小企業であり、従業員が500名以上の大企業は10社に達しない。1970年代には、企業数は1700社あったといわれる。

生産構造は二つのタイプに分かれている。多数の中小企業による分業生産、および垂直統合した一貫内製生産である。前者は専業の部品メーカーと完成品を組み立てるメーカーによる分業生産である。後者は部品までを内製して一貫生産する体制である。一貫生産メーカーのほとんどが高級時計を生産するが、その数は減少しているといわれている。コスト高で外部から部品調達せざるをえなくなっている。

近年、この地は「ウオッチ・バレー」として情報発信しているが、観光地として知られているわけではない。そこでラ・ショ・ドゥ・フォン周辺の時計メーカーの工場に、観光客を招いてそこで時計を直接販売する試みも始まった。ヌーシャテルの観光協会には、日本語で「ようこそ」という垂れ幕がかかっていた。立派な時計博物館が設置されているが、一部では時計の職人養成も行っている。地域全体で人材を育成する施設も設置されている。

ここには時計メーカーだけが立地しているのではなく、精密機械メーカーも存在する。その中には工作機械メーカーもある。ヌーシャテル大学や研究所とは別に、現在、ラ・ショ・ドゥ・フォン郊外にインキュベータ施設も建設されているが、新たに海外の企業も工場を新設する動きもある。

スイスには世界的な競争力を持つ民間企業が少なくない。伝統を継承する技術と新しい経営スタイルで、スイスの時計産地もみごとな高付加価値産業として蘇った。日本の「ウオッチ・バレー」であった諏訪地域に集積していた多数の時計メーカーはどうすべきであったのであろうか。

論壇

国を危うくする現政権

反対意見に対し敵意をむき出し

緒方 修

T.2015 10/29

品格を疑うような発言に驚いた。ユネスコへの拠出金を停止しようか、というのだ。「南京大虐殺」の世界記憶遺産登録がきっかけだ。中国が言うことを聞かなかったので、ユネスコに矛先を転じ、自民党の二階俊博議員が非協力を言明したのだ。

ユネスコの理念は、第2次世界大戦の反省に基づき「人の心に平和のとりでを築く」ことだ。二階議員は反対に、ユネスコと中国にけんかを売っている。そもそもこの議員は大の親中派で、議員を大勢引き連れて何度も訪中している。南京虐殺が事実であることは十分承知し、反省もしているようにみえた。しかし今回の発言は、世界記憶遺産として認めたユネスコを脅迫しようとしている。中国人をたくさん殺したことは事実だが、あまり世界中に宣伝してくれるな、ということか。

「沖縄の新聞はつぶさなあかん」と言った作家、「メディアをこらしめるためにスポンサーに圧力をかけよう」と唱えた自民党議員を思い出す。歴史を無視し、真実をゆがめ、政治的圧力で自分の言い分を通そうという考えだ。

このままでは沖縄戦の民間人の死者も、なかったことにされかねない。現に政府は集団死に軍は関与していない、と主張していることはご存じのとおり。手りゅう弾を住民に渡しておいて、関与していないもないものだ。沖縄住民が一人一人、軍の武器を奪って自決したとでも言うつもりか。

菅義偉官房長官は「私は戦後の生まれですから」と、日本の沖縄侵略の歴史をないがしろにしている。薩摩侵攻や琉球処分、沖縄戦の犠牲を説く翁長雄志知事に対し、いまさら昔の負の歴史を言い募るな、と説いている。

安倍晋三首相が主導して7月に「明治日本の産業革命遺産」の登録が実現した。それは韓国にとっては強制労働と収奪の象徴だった。現政権の国際常識の無さがこの国を危うくしている。

日本政府は、自分たちに反対のあらゆる国（中国、韓国）、地域（沖縄）、組織（メディア、ユネスコ）に対して敵意をむき出しにしているようだ。今回の発言に対し、松浦晃一郎元ユネスコ事務局長は「墓穴を掘る」と指摘している。

一方で世界遺産登録を申請し、他方で非協力に転じれば、それこそ「政治利用」と世界中から非難されるだろう。日本政府がやるべきは、自衛隊員を世界のどこへでも派遣し命の危険にさらすより、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）のような国際的組織を通じて世界平和に貢献すべきではないか。

（那覇市、東アジア共同体琉球・沖縄センター長）

2015・10・29　沖縄タイムス

第23回　文部科学省後援

世界遺産検定

SEKAKEN

こんな業界で役立ちます　旅行・観光　エアライン　商社　国際金融　メーカーの海外拠点　マスコミ　文化・教育機関　国際機関

沖縄会場実施決定！

■試験会場：ウエルカルチャースクール真地本校
1F第5教室
〒902-0072　那覇市真地329-1
最寄のバス停：真和志高校前
■学内試験日時：2016年3月6日（日）
3級　12:20～13:30　　2級14:20～15:30
■受検料：団体割引価格が適用されます。
3級／ 3,500円　2級／ 4,500円
2・3級併願／7,200円
■申込方法：インターネットから専用申込コードを使って2月1日（月）17:00までに申込み。
■問合：緒方　修（ 090－5315-4728 ）

事前講義実施日　●場所　3F第2教室
●日程　2月20日【土】　●時間　19:00～21:00

団体割引を使った検定の申込方法

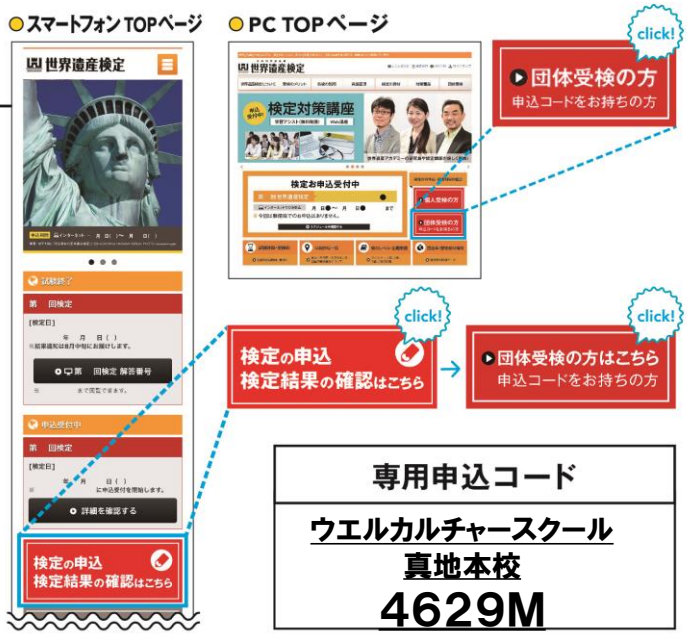
［お問合せ先］
世界遺産検定事務局　☎03-6267-4302（10:00～17:00、土日祝休み）

世界遺産検定のHPにアクセス
www.sekaken.jp
○…PC、スマートフォン対応　×…ケータイ不可
一般の申込と入り口が異なりますのでご注意ください！

右の5ケタの申込コードを入力後、画面の案内に従って進んでください

受検料のお支払い　Ⓐ クレジットカード払い　Ⓑ コンビニ・ゆうちょATM払い
※支払期限があります。支払期限を過ぎた場合は、再度お申込ください。申込後の受検級の変更や、会場の変更はできませんので、お申込の際間違えないようご注意ください。キャンセルや、病気・ケガ等による欠席など、いかなる理由があっても受検料は返金できません。

受検票が試験日の約10日前に届きます



専用申込コード
ウエルカルチャースクール
真地本校
4629M

CHALLENGE!
例題に挑戦！
（答えは下）

3級
『自由の女神像』の内部の鋼鉄製の骨組みを設計したのは誰か。
1 キュスターヴ・エッフェル　2 ル・コルビュジエ
3 アントニ・ガウディ　4 ヨーン・ウッツォン

2級
『アツィナナナの熱帯雨林』で生息する絶滅危惧種として、正しいものはどれか。
1 カカツオドリ　2 バルマヤブワラビー
3 キツネザル　4 スリランカヒョウ

3級：1　2級：3